

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	学会誌のdignity とは
別タイトル	The dignity of academic journals
作成者（著者）	佐地, 勉
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(1). p.90 91.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r023
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD67832277">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD67832277</a>

## 学会誌の Dignity とは

40年の大学教員生活の最後に回ってきた依頼原稿は、東邦医学会雑誌の2016年最初の「論評」だった。2000年までの10年間編集委員長を拝命していた私が、この学会誌の批評を論じるという巡り合わせとなった。

一般にその学会誌が、どのくらい真剣に global health を考えているか、research mind を養っているか、どのくらい威厳 (integrity) をもっているかは、その雑誌の preface, editorial を見ると理解できるという程重要と思われる。

The Lancet (Lancet) (impact factor : IF 45) は、1823年、外科医 Thomas Wakley によって創刊された。名前の由来はメスの1つである lancet と、光を取り入れる lancet window からつけられたと言う。ちなみに The New England Journal of Medicine (NEJM) (IF 55.9) も初版は The New England Journal of Medicine and Surgery となっている。私は最近10年くらいこの2つの雑誌を購読しており、退任後もしばらく続けるつもりだ。なぜか手元に配達

されるとほっとする。図1に1812年のNEJM創刊号表紙、図2にその目次を示す。

ここでLancet 2015 April 11, Volume 385, Number 9976の記事を紹介しよう。このissueの最初の“Editorial”は“China’s medical research integrity questioned”という衝撃的なものだ。よくぞここまで勇気をもって言い切った、さすが1823年October 5創刊のUnited Kingdom (UK)の威厳かと、晴れ晴れとした心持ちだった。すなわちその内容とは「英語で書かれた中国からの論文の数は今や米国に次いで世界で2番目に多く、2019年には米国、欧州、日本を追い抜く勢いである。しかしその清廉さ、潔癖さは疑わしく、内容は fabricated (でっち上げ), falsification (偽造, 歪曲, 虚偽), plagiarism (剽窃, 盗み取り) である」。今や論文を完成させる事業者もあり、さらには ghost writer ならぬ ghost reviewer も存在する。ある日本の雑誌の編集委員長が reject した論文を、翌週違うタイトルで再

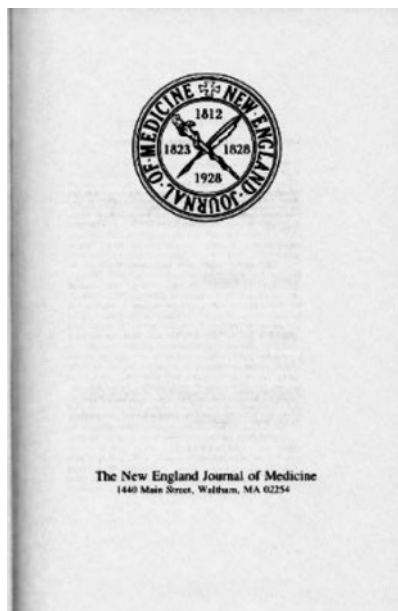


図1 The New England Journal of Medicine 1812年 創刊号の表紙

TABLE OF CONTENTS.	
ORIGINAL PAPERS.	
REMARKS on Angina Pectoris. By John Warren, M. D.	1
Some Remarks on the morbid effects of Dentition. By James Jackson, M. D.	12
Account of Bichat	26
Cases of apoplexy, with dissections. By John C. Warren, M. D.	34
A concise view of the results of Dr. Davy's late electro-chemical researches	42
Observations and experiments on the treatment of injuries occasioned by fire. By Jacob Bigelow, M. D.	52
Remarks on Diseases resembling syphilis. By Walter Channing, M. D.	65
Case and dissection of a blas female child. In a letter from John H. Dersey, M. D. of Philadelphia	69
Spurred eye	70
SELECTED PAPERS.	
Physiological researches, respecting the influence of the brain on the heart. By C. Brodie, F. R. S.	71
REVIEW.	
Dr. Ruz's introductory lectures	81
Dr. Stevens's inaugural dissertation on inflammation	87
Mr. Moore's letter on the casu medicinale D'Husson	97
INTELLIGENCE.	
Spina Mith	98
Dr. Adams' lectures	102
Mr. Cliss	ib.
Watts' Plates	103
Theston's botanic lettery	ib.
Titford's Hortus Botanicus Americenus	ib.
Brande on alcohol	104
Amber	ib.

図2 The New England Journal of Medicine 創刊号の目次

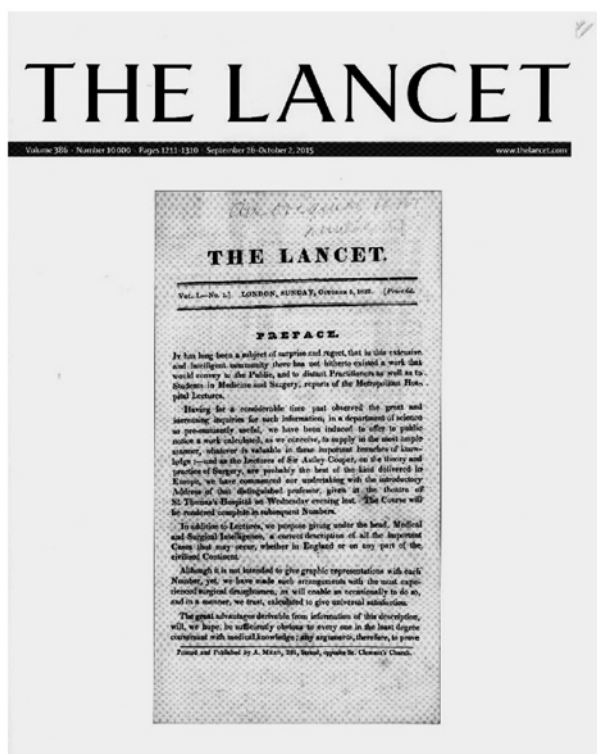


図3 The Lancet の創刊号の“Preface”を配した Volume 386, Number 10000, 2015 の表紙

投稿してきた, 著者名を変えて違う雑誌に再投稿してきた, という事実には驚愕していた. Lancetのこの号の最後は, 「今後私達の雑誌は彼の国との collaboration を通して medical science の領域で信用できる実りの多い未来を期待する」と結んでいる. これまで数回掲載されてきたが, 実に political なコメントではなからうか.

さらに, May 30, Volume 385, Number 9983 では表紙に「研究上の不正行為 (misconduct) はいつでも起こりうる, 故に詐欺行為のような論拠のない主張を取り扱う強固な機関・体制を作るのではなく, 今挑戦すべきことはわれわれの居る惑星の進歩を探るために継続可能な研究上の“環境”を作り上げることである」と論評した.

最後に, September 26, Volume 386, Number 10000 記念号の表紙は, 1823年の初刊行誌の“Preface”を配し(図3), “Editonial”に Lancet を発行するに至った経緯や意義

を述べた論評を再掲している. すなわち「重要な, そして優秀な professor の講義の内容や大病院の内科・外科などの情報を, 遠方の医師や公的な場所へ発信する必要がある. 講義の他にも豊富な知能を英国ばかりではなく幅広い大陸まで送り届けることができる」と. 最近の中国にすりよる英国経済の流れとは全く一線を画する Lancet の気概を垣間見た気がする.

さまざまな情報を発信する新聞社は通常3つの柱 — 情報を集め記事にする部門・記事を配置し紙面を作成する部門・広告を掲載し, 資金を集め, 販売する部門 — から成り立っているようだ. 医学誌もこれと同じで, 正確な情報をより広く, そして早く読者に伝える使命を持っている. 医学における新しい情報は, 研究者のモチベーション, ポリシー, 個人の人間性の証そのものだと思う. 集めた情報から未解決の問題を掘り出し, その重要性や発展性を占い, 何を明らかにしようとするかの target を設定し, その仮説を証明する方法を理論的に構築する. 統計学的に崩れない・崩されない予測を立て, エビデンスを導き出せる可能な限り自然な方法論で, そして結果を歪曲・偏見なく解釈でき, また客観的・普遍的に公正な討論・考察を行い, 結論を発信する. 論文作成とはただそれだけのことを理路整然と真摯な態度で客観的にも認められる方法で行うだけのことである.

一方, 査読者は, どの発想が新しいか, どんな考え方が優秀か, 社会にどんなインパクトを与えられるか, どんな一石を投げられるか, 信憑性は高いか, 魅力あるか, 患者に還元できるか, 再現性はあるか, 医学の進歩を妨げないか, 後退させないか, そして本当に嘘はないか, 100年・200年後にも敬意を表する研究か, を審査する必要がある.

40年前にこの小児科学講座に入った後, 学位論文の校閲を受けるために, 当時日本一厳しいと言われたN教授の部屋を訪ねたら, 「君が死んでも論文は永久に残るからね」と念を押された.

今後も90周年を迎えた大学の東邦医学会雑誌から, 普遍性をもった多くの研究成果が発信されることを期待して止まない.

(小児科学講座(大森)教授: 佐地 勉)

DOI: 10.14994/tohoigaku.2016.r023